



マゾ援交

男達の願望通りに好き放題にされながらマゾ気質で発情しまくる女子校生

ACT.1 依頼



最初は、興味本位の気持ちで請け負っただけだった。

学校の仲のいい友達から受けた、突然の誘い。
それは、援助交際のヘルプをしてほしいという、突拍子もない頼みだった。

そのクラスメートの彼女は、
何年も前からおじさんたちを相手に援助交際をしているような子で、それを私に隠すことも無く話してくれて、楽しい小遣い稼ぎとしていつも笑い話にしていた。
私はそんな彼女のさばさばした所が好きだったし、刺激的なその話題に興味があったのも事実だったりする。
けど、私自身はそんな経験も無く、まったく関係ない世界のことだと思っていた。

そんな彼女の頼みを聞いてしまったのは、いつも飲み食いや遊ぶお金を彼女が出してくれていたことへの後ろめたさがあって、
何も求めてこない彼女にお返しがしてあげたくてというのが理由だったと思う。
けど、どこかその誘いに心惹かれるものを感じていたのも事実だ。

私は、悩みながらも彼女の頼みを了承した――。



私は彼女に連れられ、ラブホテルの一室に来ていた。

思っていた以上に広いその場所で、私は借りてきた猫のように所在なさげにベッドの端に座りこむ。私をおいてすぐ部屋を出ていこうとする彼女は、ここで待ってればいいよ、とだけ笑顔で言い残した。すべて相手がリードしてくれるからと。

軽い気持ちで請け負ったけれど、さすがに寸前になると逃げ出したいほど緊張してくる。お金をもらってSEXをするなんて、想像もしてなかった。私は胸の高鳴りを抑えながら、耳鳴りのするような沈黙の中、来るであろう相手を待った。

数分のうちに相手は来た。中年の小太りの男だった。仕事帰りののか少し乱れた髪に汗を拭きながら部屋に入ってくる。多汗症なのかもしれない。

私はつい男をまじまじと見てしまう。普段なら男の姿に嫌悪感しかもたないのだろうけれど、今から抱かれる相手にそんなことを考えては本当に逃げ出してしまう。

私が男と交渉したわけでもなかったし、勝手がまったくわからないままなのもいけなかった。彼女には一応この男の事を聞いたけれど、どんな相手なのかもまだよくわかっていない。早く打ち解けてしまおうと私は男に声をかけた。

「すみません。こんにちわ。 私は――」

けど、男はそんな私を一瞥してニヤニヤと笑うだけ。

何か不気味なものを感じて私はつい反射的に立ち上がろうとしたが、その前に男が上着を脱ぎ始めたので、結局身動きが取れなくなってしまった。

「あっ あのっ……」

何も答えないまま、男は私の前に立ち塞がると、ベッドの上の私を見下ろした。私は不安感に苛まれる。この男は何か様子がおかしい……。





「きゃっ!？」

唐突に男が覆いかぶさってきた。
私をベッドの上に無理やり押し倒すと、乱暴に胸をわし掴みにしてくる。

「いやっ、ちょっと! 何するんですかっ」

突然の男の行為に私は怖くなって逃げようとしてたけれど、
力で抑え付けられて身体がまったく動かない。

「良い身体してるなあ嬢ちゃん」

そう言って、男は舌なめずりするように下卑た表情で私を見下ろしてくる。
こんなだとは話に聞いていない。
男は明らかに私をレイプしようと迫ってきていた。

「いやあっ 止めて!」

「うるせえっ! 黙ってる」

怒声に血の気が引く。
男の脅迫的な言葉に、私は自分の置かれた状況を悟った。

もしかしたら、彼女に騙されたのかもしれない……。





身を振ってベッドの上をひたすら逃げ惑う。
「いやあつ いやあああつ」

「どうした？ もっと抵抗しないとレイプされちゃうぞ～」
「やっ 止めてっ お願いいっ」
「冗談じゃねえ。お前を犯すためにどれだけ払ったと思ってんだ。
今日は金玉が空になるまでやりまくりだ」
「私、そんなつもりじゃ… ああうっ」

制服に手がかけられ、引き千切のような勢いで男が脱がしにかかる。
なんとか手でブロックしようとしても、
力の差は歴然で無駄な足掻きにてしかない。
自分の無力さに涙が滲んでくる。

「誰かあつ 誰か助けてええええっ！ 誰かあつっ！」

男が恐ろしくて半ばパニックになりながら部屋の向こうに助けを求めた。
部屋の向こうに居るはずの彼女に。

けれど、返事は何一つ無い。
ただ悲鳴と怒声が部屋の壁に反響していた。





ずらされたブラから胸が飛び出し男の前に晒される。
男は服を脱ぎ、こんどは私のパンツにも手をかけた。
すべり込んできた指は陰毛を掻き分けて陰部の中に分け入ってくる。
膣の位置を確かめるように男の指が肉唇を弄り、そのまま中に入ってきた。

「はああんっ いいっ」
「フへへ……」

体の中を芋虫が這いまわってくるような感覚に、私は身を振った。

「いやあっ 指入れないでっ」
「わかんねえガキだなあっ」

パチンッ

平手打ちの乾いた音が響く。私の頬の痛みに驚いて放心状態になった。

「そんな、私……」
「こんな所にノコノコやってきといて何言ってるんだ。
チンポが初めてってわけじゃないだろ」

男は指先で私の膣を釣り針のように引っ張り上げる。
赤く腫れあがった肉棒がムクムキと立ち上がり、
龟头が首をもたげながら私の膣にあてがわれた。

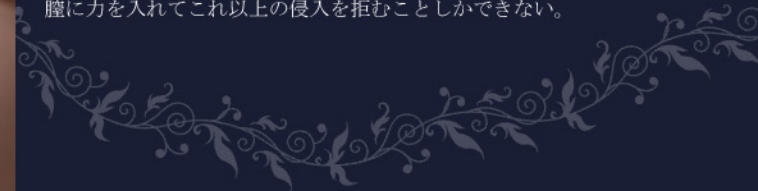
無理やり入れられる。

「あぐうっ ううっ いぐっ! あっ」

まだ準備のされていない膣が無理やりチンポを押し込まれて悲鳴を上げる。

「どうだ。抵抗しないのか。さっきの勢いはどうしたあ?」

抵抗しようにも、身体が萎縮してチンポに耐えようとするだけで
精一杯だった。
膣に力を入れてこれ以上の侵入を拒むことしかできない。





「こんなエロい身体しててなに処女みたいに気取ってんだ。男の為にオマンコパッキリ開いてチンポ待ちしてるほうがよっぽど似合うぜ。本当はこんな風に突かれるのが好きなんだろ」

「ひやああっ ああっ！ そんなあっ 押し込まないでえっ」

男は言葉で私を追い込みながら、陵辱しようと強引に体重をかけてきた。無理やりねじ込まれる龟头が膣に食い込んで離れない。身体を反らしても、どんどん中に入ってきてしまう。

「入っちゃうよ。いやっ 無理やりなんてっ…」
「マンコに入れられるのがいやならイラマチオでもするか？
ロマンコでザーメン無くなるまで啜え続けるなら許してやってもいいぜ」

「そっ そんなことでいいっ ないっ からっ あくうんっ！」
「だったら黙って膣で啜えこめばいいんだよ。オラっ」

ズンっ！！

「ああうっ…… ああんっ！ ああっ あっ」

男がチンポすべてをねじ込もうと、何度も何度も腰を打ち付けてくる。その動きはぎこちないものから、段々自然なものへとかわっていく。犯されながら、私の膣は愛液でじっとりと濡れていた。

それは身体の自衛機能だと自分では信じたかった。けど……、自分自身こんなに拒んでいるのに、男のチンポが身体に押し込まれるたび、陰部からは激しい疼きを感じてしまっていた。

レイプされているというのに、胸の高まりは発熱のように高鳴っていく。知らない男の赤く腫れあがった肉棒に陵辱されていると考えただけで、ピクンっとして身体の中で震えるものを感じる。

その理由が自分でもまったくわからず、私は余計に困惑した。





「邪魔くせえっ。 ケツ上げろ！」

男が苛立ちながら私のスカートとパンツを引きずり下ろし、さらに身体を密着させてきた。肌と肌が張り付いてチンポが吸い付くように食いつく。

「いいふっ んんうっ！！」

強引に突っ込まれた肉棒は一気に奥まで食い込んだ。痛い。けど……

力づくで抑え付けられ肉棒を打ち込まれているというのに不思議に充足感があることに自分自身で驚く。普通のSEXでは感じなかった、中と外から征服されるような圧力。けれど、そんなものは妙な矛盾でしかない。実際は、恐怖心に私の表情は引きつり身体は苦痛から逃れようと腰をくねらせていた。本当に今にでもここから逃げ出したいのだ。

二律背反の感情が私の中で渦巻いていた。逃げようとしても逃げるわけではない。

恐怖と快感。

その自分の気持ちに気づいたとたん、膣から蜜が溢れてとまらなくなる。苦悩の度が増すほど、私の身体は何故か感じてしまっていた。男にされるがまま、これから犯される自分の姿を想像して。

男はそんな私の苦悩もつゆ知らず、容赦なくチンポをピストンのように動かして私の膣を蹂躞する。むしゃぶりつくように乳房を舐め回し、両手で身体を弄ぶ。





「びっちょびちょになってきたぞお。かまとぶつて大した淫乱じゃねえか。
レイプされるのがそんなに気持ちいいのか」
「ちっ 違うっうんっ！」

「そんなこと言っって、いつもいつもやりまくってんだらう？
嬢ちゃんの年頃ならチンポ嵌めるのがお勉強みたいなもんだしなあ。
毎日とっかえひっかえ、いろんなチンポで楽しんでるんだろ。
オレもたっぷり中出しさせてもらうぜ」

「なっ 中ダメえっ 中に出されたこと無いのおっ」

「うるせえよっ！ 出すぞっ くせえザーメン大量にい ううおおおっ！！」

男は腰を細かく動かした。龟头の先で激しく子宮を叩き続ける。
そして、低いうなり声とともに肉棒を突き上げた。
絶頂のスペルマが弾ける。

「っ いあああああっ！ つつ んくうううう！！」

迸る熱い精液が子宮の中に溢れかえった。

「ひやああんううっ あくうう…… ああんっ ああっ…あっ」

熱い…熱いっ……

ゾクゾクと身体に電流のようなものが走り、私は腰をくねらせて悶える。

今まで感じたことのない快感。
それは……、支配される悦びだった。





男はその後私を好き放題犯した。

裸に剥かれ、全身を管め回され、
男に服従を誓うように股を開いて肉棒の中に受け入れる。

数え切れないほど中出しされ、徹底的に中を蹂躪された。
男は嗜虐心を満たすかのように私を弄んだ。

全身の穴を覗かれ、その中にまで指や舌を入れられる。
自分のオマンコを突き立てたイチモツを喉の奥にまで押し込まれ、
嗚咽を上げながら逆るザーメンを飲み込んだ。

私は、何度となく押し寄せる体感したことのない恐怖と絶頂に溺れ、
気を失った。



いつのまにか気絶するように寝ていた私は、彼女に起こされた。

部屋には私と彼女だけ。
あの男の姿は既に無かった。

笑顔を向けてくる彼女に、私は飛び上がるように起き上がって、これはどういうことなのだと怒り交じりに問いただした。
けど、あっけらかんとした彼女は約束をすっぽかした次の日のような態度で、

「ごめんっ！」

と手を合わせて謝るだけ……。

それを見て私も怒る気力が萎んでしまう。
私はため息をついて、どういうことなのか話を詳しく聞くことにした。



今回の話は援助交際なのは間違いなかった。
けれど、それはちょっと特殊な事情のものでもあった。

彼女はたくさんの男と関係を持つうちにそれなりに人脈もできてきて、援助交際の口利きの斡旋のような事をするようになったのだという。
そんな中で、男の方からもいろんな要望をされるようになった。
普通じゃ聞いてもらえない。やってももらえないような事を、させてくれる女の子を紹介してほしいと。

そして、今回来た案件は、女の子をレイプさせてほしいという要望だった。

依頼上、すべて知ってる彼女自身がやるわけにはいかなかったし、
誰か代役を立てようという所で、何故か私に白羽の矢を立てたそうだ。
それで援助交際という話だけして、何も知らない私をここに置いてセッティングをしたらしい。

事情はよくわかったけれど、おかげで怒りも沸々と再燃してきた。
彼女のすることでも、いくらなんでも身勝手すぎる。

私は説教するつもりで、彼女を叱りつけようとした。
けど、彼女がお礼金としてポンっとベッドの上に置いたお札の額を見て、私は一瞬身体が固まってしまった。

ベッドに広げられた一万円札をじんまりみながら一枚一枚数える。
週末してるバイトの月額が平均4.5万としたらその五倍ほどある。たった一夜の事で……。

冷や汗タラタラ顔が溶けそうになった私を見ながら、彼女はこれからもできれば協力してほしいと頼んできた。
若いうちが花。めんどくさい交渉は私がやるからと。

私は考えさせてほしいと返答したが、
結局、ホテルの入り口を出たところで彼女の申し出を了承することにした。

割の良いバイトというのもあったけれど、彼女のいるアブノーマルな世界をもうちょっと覗いてみたかった。



ACT.2 色狂い



次の週、

私は別の相手と今度は高そうなホテルの一室にきていた。

窓の向こうに広がる外の夜景を眺めながら、緊張で高まる鼓動を落ち着かせる。
今度は彼女から事前に詳しい話を聞くことができていた。

今回のお客はSEX中毒で、いろいろ問題を起こすタイプらしい。
多分朝まで離してくれないだろうと彼女は笑っていた。

私が見る限りには、男はいたって健全そうな人物だった。
髪も服も整っていて清潔感がある。物腰も柔らかく普通に女性との交友関係もありそうに見えるのだけれど、
ここに私を呼び出したという事は、なにか人には隠した影の部分を持っているに違いないのだろう。

男は私を呼び寄せると、もっていた旅行カバンをベッドの上で開いた。

中に入っていたのは、大量のパイプにローター、拘束具などのアダルトグッズ。それにたくさんの女性用の衣服だった。
男はその中から、嬉しそうに体操着を取り出す。

体操着を掲げながら、ニタァッと笑いかけてくる男に、私は引きつった笑顔を返すしかなかった。





体操着を着せられベッドに座らされた。
こうしてベッドの上で着てみると、とてもHな服装に思えてくる。

「素晴らしい。とても似合っているよ」
「あ、ありがとうございます」

満足そうな男の表情に、私も釣られて返事する。

「少し小さめの体操着にしたのが良かった。
豊かな胸をとても強調できている。
オマンコも肉厚で肉付きの良い太股もブルマと合っていてとても良い。
見ているだけで肉感が伝わってくる。
君は体操着を着るために生まれてきたような子だね」

「は、はあ、そうですか…」

何度も満足そうに頷く男に多少置いてきぼりをくらいながらも、
私も身体を柔らかく締め付けるこの服の肌触りを結構気に入っていた。
下着を脱いで直にきたおかげで、擦れるたびに性感帯に適度な刺激を感じる。
肌の感度を高めてくれるような心地良さがあった。

「ああ。オナニーしたくてたまらない。
でも今日は、いっしょにいっぱいSEXして楽しむ日なんだから、
一人で無駄玉打つなんて邪道だよ」

男はまた一人でうんうん頷く。
やっぱり変な人かも知れない。

「それじゃあ、まず身体を解すところからはじめようか」



マゾ援交

男達の願望通りに好き放題にされながらマゾ気質で発情しまくる女子校生

体験版は以上になります。
最後までご観覧していただきありがとうございました。

男は私の股の間に座り込み、股を凝視しながら指でツンツンと悪戯してきた。何度も何度も肉唇をなぞるように陰部を弄くられ、ブルマの上から膣に指を押し入れられる。

「ふぁぁ……」

その心地よさについて声が漏れた。優しいソフトな刺激。だけど、この上なくおちっこい。

指が膣に押し込まれるたびにクリトリスが擦れて声が出そうになる。擬似的なSEXのようで、性感帯を中心に直接刺激する指先の動きに、私は簡単に感じてしまっていた。

だんだん見てわかるほど愛液の染みがブルマに広がり始めて、私は自分の息が荒くなるのを実感する。

「感じているのかね？」

男は私の反応を見ながら指使いを巧みに変えてクリトリスを愛撫し続ける。なんだかもう肉棒で犯されるより感じてしまっている。愛液は布地をビショビショに濡らしても収まりきらず、お尻まで垂れてくるほどになっていた。こんなに焦らされ続けては、股の付け根熱く痺れてしかたない。

「はっ、早く……下さい……」

もう仕方なくなって男に懇願する。変質的なこの男に主導権を握られたら何をされるかわからない不安感もあったけれど、それ以上に、早くもっと強い刺激を感じたかった。

絶頂を感じたくてたまらなかった。

「そうか、じゃあたっぷりイカせて上げようね」

芝居がかった台詞を言いながら、もったいぶるようにゆっくりと立ち上がる。男は再び旅行カバンに向き直ると縄を取り出し、私に向き直って、ビィンッ！ と、両手で引っ張った。

部屋の中に乾いた音が響いた。